

QUIRKY FORCES

BY CHRIS WARDLE

（訳注：この本には、マジック雑誌である「ABRACADABRA」誌だけでも100以上のトリックを投稿しているイギリスのクリエイター、CHRIS WARDLEにより紹介・改良・考案された52のフォースとそれを使ったマジックが解説されています。かつて偉大なるメンタリスト ANNEMANNの本に「202 METHODS OF FORCING」がありましたが、それはフォースの方法だけを述べているものが多かったと記憶しています。この本は1つ1つのフォースを完全なエフェクトの中で説明しているのが特徴です。

52もあると、その内容も変化に富んでおり、中には準備に手間のかかるものもあります。しかし、やるやらないは別として、その発想の豊かさには感心させられます。訳者的にも面白いと思うものがいくつもありました。読者のレパートリーに入るものがきっとあると思いますので、お楽しみください。

なお、タイトルの「QUIRKY」とは、「風変わりな」、「とっぴな」、「予測できない」などの意味です）

はじめに（要約）

この本は、ダイレクトでシンプルな、あまり知られていないフォースとそれをどう使うかを示すためのエフェクトを集めたもので、マジシャンとメンタリストの双方に適したものです。

あるものは、古い原理をよりディセプティブ（だまされやすい）且つはるかに有効に発展させたものですし、あるものは、新しい原理と古い原理を組み合わせたものです。つまり、大昔の「1089FORCE」とか、新しいADAM HUDSONのACAANのやりかたとかをうまく応用しています。また他のものは、「REVERSE IMAGE FORCE」のような新しいアプリを使ってしています。

（訳注：「1089FORCE」は有名ですね。例えば、3桁の数を思わせ（仮に731）、それを逆にして引かせ（ $731 - 137 = 594$ ）、それをまた逆にして足させると（ $594 + 495$ ）、常に「1089」になります。ADAM HUDSONのやり方は、16の数字から選ばせた4つの数字の合計を使ったACAANのやり方で、原文115頁「ACAYLN,IBAH」に応用されています。

「REVERSE IMAGE FORCE」は、本文の中で説明されます）

内容はそれぞれ異なりますが、どれもすっきりしたやり方で、ほとんどのものが最小限の道具しか使いません。実用的なほとんどセルフワーキングなやり方であり、あなた自身のルーティンを作るのにもきっと役立ちます。あるものはすぐ出来ますし、多くは、「GETTING THE RED CARD」や「BARGAIN PREDICTION」のように即席で出来るものです。その他のものは、もう少し準備が必要で、ノートパッドやペン、日記、そしてあなたのマジック用工具箱にあるであろうカードとかサムチップなどを使います。

また、違うプレゼンテーションによるヴァリエーションもあります。また、自由に選ばせた1つの数字を基に、魔法陣で特定の結果を得るアイデアもあります。

この本で私は、単にフォースのやり方のコレクションを示すだけではなく、それらがルーティンの一部となって、完璧なパフォーマンスを構成することも示したかったのです。あるものではサトルティーが使われており、あなたがこれらフォースを自分でいかに使うかを考えるうえでの参考になるでしょう。

私は、ANNEMANNの古典「202 METHODS OF FORCING」の本のファンですが、フォース

の説明が往々にしてごく簡単で、それをいかにエンターテインメントの中に組み込んで活かすかについて悩んだものです。

（訳注：同書は訳者も随分昔に読みましたが、簡単なものでは説明が10数行で終わっているものもあったように記憶しています）

それもあって私は、読者に完全なエフェクトとを提示することで、フォースという「骨格に「肉」付けしたものをお見せしたかったのです。

この本の多くのアイデアは、今まで本や雑誌に発表されたことはほとんどありません。その他のものは、私がいろいろな所に投稿して来た多くのアイデアの中から気に入ったものを選んでいきます。しかしそのどれもが、何度も繰り返して演じている中で発見された問題点などを修正、改善してきています。その結果、どれもがオリジナルよりも進化し、新しいもののようになっています。

この本では、フォースの方法をいくつかのカテゴリーに分類していますが、ある方法が他のカテゴリーにも当てはまる場合もあります。この本の分類は、あなたの必要に応じたエフェクトや方法を探す時のガイド役として設けたものであり、厳密なものというわけでもありません。

私はここで、何回も受賞しているマジシャンであり、この本の編集にその類まれなる編集能力を発揮してくれた JAMES WARD に感謝したいと思います。彼とは、「創造力」についての本、「CREATING THE IMPOSSIBLE」も共同執筆しましたし、IBM イギリス支部の雑誌「KEY RING」のコラムも一緒に書いています。

この本を読むのを楽しんでいただき、古典的フォースの発展形や応用例、またいくつかのオリジナルのアイデアを見ていただき、何か役に立つものを見つけていただけるのを大いに期待しています。

2022年3月 M.I.M.C.GOLD STAR CHRIS WARDLE

（訳注：「M.I.M.C.」とは、ロンドンに本拠を置く、イギリス最古のマジック団体「MAGIC CIRCLE」の上級メンバーで構成する「INNER MAGIC CIRCLE」のメンバーであることを表しています。その中でも「GOLD STAR」保持者は最上級のメンバーとされており、他のメンバーからリスペクトされています。ただ、こうした、イギリスの上流階級を模したような組織形態に反発するマジシャンもいます）

（著者注）

この本のエフェクトの中には、ちょっとした用具を作るのに「はさみ」を使うものがありますが、注意して扱ってください。事故等については、著者も発行者も責任は負いかねます。

個々のエフェクトや方法についてクレジットすべきものには十分注意を払ったつもりですが、もし漏れているものがあれば、教えていただければこの本の再販時に含めたいと思いますので、よろしくお願いします。マジック、特にメンタリズムのやり方の起源を解き明かすのは、時に煙と格闘しているようでよく分からないことがあるのです。

RICHARD KAUFMAN には、「GENII」誌 2015 年 4 月号に掲載した「BARGAIN PREDICTION」をこの本に載せる許可をくれたことに感謝します（KAUFMAN は 1999 年から「GENII」の発行人兼編集者となっています）。同様に、SAMUEL PATRICK SMITH と PRESTON NYMAN にも、彼らの作品掲載の許可をくれたことに感謝します。

また、JAMES HOWELLS には表紙のデザインを作成してくれたことに、MAX PRITCHARD、PAUL HALLAS、JAMES WARD には各種助言をもらったことに感謝します。

PART ONE—FORCES WITH WORDS(言葉を使うフォース)

SOLVED ! (一件落着 !)

客が探偵となっていくつかの選択を行い、その結果殺人事件の「犯行現場」、「凶器」、「犯人」さらには「犠牲者が握っていた小銭の額」まで解明してしまうのです !

(現象の詳細等)

このルーティンは、CLUEDO あるいは CLUE という事件をテーマにしたボードゲームを基にしたもので、「WHODUNNIT=誰がそれをやったのか? =犯人は誰だ?」系のものです。

メンタリストは A4 判のカードを取り出しますが、そこには 3 つの長方形が 4 列書かれています。各長方形には部屋や凶器の名前などが書かれており、カードの下には O が書かれています。(訳注 : 各長方形の記載事項は 4 頁の表の通りです。

上段左から犯行現場として、「ラウンジ」、「図書室」、「舞踏室」、「美術品展示室」

中段左から凶器として、「もり」、「毒」、「ナイフ」、「ロープ」

下段左から犯人として、「MUSTARD 将軍」、「PEAR 教授」、「LAVENDER 嬢」、「PEACOCK 夫人」

が、書かれています)

最後にひもで口を絞った袋も見せておきます。

メンタリストはある殺人事件について語り、これから客に探偵の役をやってもらうと言います。探偵は、事件の犯行現場、凶器、犯人を見つけて、事件を解決しなければなりません。唯一の手掛かりは犠牲者が握っていたコインであり、その額が事件の起こったイギリス郊外の邸宅の部屋番号を表していると考えられています。ゲストルームの番号は「8 番」おきになっていて、8, 16, 24, 32, 40 です。客にどれかに決めてもらいますが、仮に「24」だとします。メンタリストはカードの下に書いてある O の中にハッキリと、「24」と書きます。

次に客は、自分の探偵としての直感を使って、犯行現場、凶器、犯人の内の 1 つを選びその名前をスペルします。つまり、客は 3 つのカテゴリーの中の 1 つを選んで指を乗せ、スペルの 1 文字につき 1 個ずつ長方形の上を動かして行きます。左右どちらにでも、自分の好きなように動かしてもらいます(同じ長方形の上を戻ってもかまいません)。もし、端の長方形に来たら、また元の方向に戻ってもらいます。もう一方の端へと飛ぶことは出来ません。こうして、客の動き回る指が事件を解決するのです ! ただし、そこには SCOTLAND YARD からの一連の指示による支援もあったのです。

その指示書は以下の通りです ;

1. どこでも良いので、自分の選んだ「部屋」に指を乗せなさい。そして、1 文字につき 1 つの長方形の上を移動しながら、最初のその名前をスペルしなさい。
2. あなたの直感は、「美術品展示室」は選ばないでしょう。そこには指は行かないはずで、その部屋は捜査対象から外すので、消してください。
3. もう 1 回、右でも左でも動ける方へ動きなさい。どちらでもあなたが決めなさい。着地した先を O で囲みなさい。
4. 次にどこでも良いので、自分の選んだ「凶器」に指を乗せなさい。そして、1 文字につき 1 つの長方形の上を移動しながら、その名前をスペルしなさい。
5. あなたの直感は、「もり」は選ばないでしょう。それは捜査対象から外すので、消してください。

6. もう1回、右でも左でも動ける方へ動きなさい。どちらでもあなたが決めなさい。着地した先を○で囲みなさい。
7. 次にどこでも良いので、自分の選んだ「犯人」に指を乗せなさい。そして、1文字につき1つの長方形の上を移動しながら、その名前をスペルしなさい。
8. あなたの直感は、「PEACOCK 嬢」は選ばないでしょう。彼女は捜査対象から外すので、消してください。
9. もう1回、右でも左でも動ける方へ動きなさい。どちらでもあなたが決めなさい。着地した先を○で囲みなさい。

客の選択の結果をメンタリストは確認します；

○をされたのは、「図書室」、「ナイフ」、「PEAR 教授」であり、カード下部の○の中には「24」と書かれています。

メンタリストがカードを裏返すと、そこには1枚の封筒がペーパークリップで留められています。その中から折りたたんだA4判の紙を取り出して客に渡し、書いてあることを読んでもらいます。そこには、こう書かれています；

「事件の解決に協力していただき、有難うございました。あなたは手掛かりの中を動き回って、真実を突き止めるのに努力してくれました。事件は「図書室」で起こり、凶器は「ナイフ」で、犯人は「PEAR 教授」でした。犠牲者は犯人である「PEAR 教授」の部屋番号である「24」を示すコインを握っていたのです」

折りたたまれていた予言は、客の自由な選択とすべて一致しているのです。最後に、袋の口を開けて中に4枚のコインがあることを見せます。それらは、10ペンス(P)コインが2枚と2Pコインが2枚であり、合計24Pです。バッグは客に調べてもらいますが、4枚のコイン以外は空です。こうして、事件のすべてが解明されて、「一件落着」となったのです！

(やり方)

少し長い既述となりましたが、その通りにやれば3つの要素一場所、凶器、犯人は自動的に選ばれることになります。

ここで使われているフォース原理は STEWART JAMES のもので、「THE ESSENTIAL STEWART JAMES」の本と雑誌「NEW TOPS」(1963年4月号)にあるエフェクト「STRANGERS FROM TWO WORLDS」で使われたものです。その原理はまた JIM STEINMEYER の「COINS IN A STRANGER LAND」や、MARTY KANE や ALDO COLOMBINI のエフェクトにも使われました。さらに「THE LINKING RING」誌のコラム「AUTO MAGIC」でも、MICHAEL BREGGER がこの原理を使ったエフェクトを発表しました。

ここでは3回にわたって基本的なやり方を繰り返していますが、3つのカテゴリーの中の言葉の文字数に変化をつけてあるので、フォースを疑われることはまずないでしょう。万一、数理的原理を疑われた時のために、更に2つの防壁が設けてあります。

客が、犠牲者が握っていたコインの額を予測しましたが、それが不思議にも封筒の中の折りたたまれた予言の中に現れるのです。また袋の中からもその金額のコインが現れるのです。これは2つのやり方で達成されます。

—以下省略—

THE LABEL FORCE（表示板のフォース）

鉢植え植物用のプラスチック表示板の束から、客が 1 枚を自由に選びます。それが、演技の間中離れた所に置いてあった、ギフト用に包まれた植物と一致するのです。

（現象の詳細等）

メンタリストは、その形から明らかに種物の鉢植えと分かるギフト用に包まれティッシュペーパーで覆われたものを見せます。それが何かは正確には分かりません。次に、先端が土にささるようにとがった白いプラスチックの植物の名前を書く板の束を見せます。

それらの表示用板をファン状にして、いろいろな異なる植物の名前が書かれていることを見せたら、メンタリストはそれらを裏向きにしてミックスします。板をそろえたら、客に先端を向けて 1 枚を選ばせ、抜き出してもらいます。それを表向きにすると、そこには「ミニチュアローズ」と書かれています。ギフト用に包まれた物を開けて見ると、それが正しく「ミニチュアローズ」なのです。その鉢植え植物は客にギフトとしてあげることも出来ます。

（やり方）

これは始めは 2006 年に、GEOFFREY DURHAM の「カウントダウン TV ショー」の演目の 1 つとして考案したのですが、誕生日や周年記念、結婚式などに最後に花をあげられる演目として好適なルーティンです。また、同じような表示板を使うものなら何でもフォース出来ます。

結局 TV ショーでは使われなかったので、このアイデアはしばらく自分でキープしておきましたが、2013 年の MAGIC CIRCLE の夏のレクチャーのために使い、私の「THE BOOK OF THE LECTURES」に収めました。それは有効なフォースで、私自身もいろいろな応用例を見つけられたので、この本にも掲載するべきだと思ったのです。

このフォースのヒントは、私がかって偉大なる故 ALI BONGO がやったあるエフェクトのことを思い出した時に蘇ったものです。そのエフェクトの原理は、DAVID NIXON や PAUL DANIELS のマジックショーでも使われました。そこでは、ひもの付いた丸いうべルが使われていました。ALI はかなり前に CAMBRIDGE のクラブで、この原理についてレクチャーの中で述べましたが、巧みなフォースの方法としてそれ以来私の心の隅にあったのです。

ALI のエフェクトは荷物のタグを使っていましたが、彼はそのやり方がとても気に入ったので何回も使っていると言っていました（もしそのエフェクトを見たいければ、NIXON のショーを DVD や YOUTUBE で見てください。ここでルーティンやそのやり方については、もちろん触れませんので）。

ALI の「荷物札」は、その長いサイドをテープでとめて筒状にしてありました。フォースする荷札はその筒の中に入れてあり、客はそれに付いたひもを引くことでフォースされます。一方、ギミックの筒は荷札の束の中に残ります。私もそのアイデアは気に入りましたが、荷札のひもはからまりやすく、客が 2 本のひもを同時に引いてしまうリスクがあったのです。そうすると、2 枚の同じことが書かれた荷札が出て来てしまいます（DAVID NIXON の DVD では、まさにそれが起こりかけたのが分かります。客による選択場面に、やや違和感が出てしまいました）。

道具を植物の表示板に変えることで、最後に現すものとの整合性も取れました（荷札では、本当は選ばれたスーツケースでも出すべき、となってしまいます）。

このエフェクトは、クローズアップでもサロンでも演じられますし、どちらの場合も最後に客に植物をあげられます。

表示板は 10 頁の図のように、鉛筆のような形をしています。長方形の部分だけを作って（11 頁の上図）、縦に半分に折ったら長いサイドをテープでとめて筒状にします。このギミックの上に太文字でいろいろな植物の名前を書いておきます。 —以下省略—

THE LIST FORCE REVISITED—BACKGROUND

(LIST(細長い紙) FORCE を再考する)

客は、メンタリストの持った新聞の切れ端を2か所切らせます。信じられないことにメンタリストは、その2か所を予言しているのです。

(現象の詳細等)

「LIST FORCE」は、はじめは「NEWSPAPER LINE PREDICTION」と言われており、クレジットはAL SPACKMANにあります。彼のルーティン「CLIP LINE」は、はじめ60年代初頭に「GEN」誌に発表され、その後いくつもヴァリエーションが作られましたが、その中でもHARRY BARONのやり方は素晴らしいものでした。たらして持った帯状の印刷物の切れ端に沿って開いたハサミをゆっくりと動かし、客に好きなところでストップをかけさせます。メンタリストはそこで帯状の紙片を切りますが、そこが事前にメンタリストによって予言されているのです。

それはシンプルでダイレクトであり、他への応用を考えないのはもったいないアイデアだと思いました。そこでは紙片を上下逆にしてカットするという方法を取っているため、エフェクトを2回繰り返すことは出来ませんでした。

(訳注：逆さにしてカットした紙片を客に正しい向きで渡します。そうすると、カットした部分は下になり、当初の上部がカットした部分のように見えます。どこで紙片がカットされようとも、その部分は当然変わらない訳です)

しかしながら、このフォースについて再考しているうちに、あたかもランダムにカットしているように見せながら、もう一度繰り返すことが出来ることに思い当たりました。つまり、自然な形で続けて2つのものをフォース出来る訳で、有効性が倍化することになります。私は3つのヴァリエーションを説明しますが、それぞれに持ち味があります。最初に説明するものは、新聞紙とハサミを借りて即席で出来るものです。

即席版—DOUBLE LIST FORCE

新聞紙を借りたら、メンタリストは広告欄など、写真のない文字だけの頁を抜き出します。またメンタリストは何かを紙に書いて折りたたみ、観客の1人に渡しておきます。

次にメンタリストは、新聞のその頁から買い物のレシートのような感じに長細い紙片を切り取ります。その紙片の上をつまんで持ったら、ハサミの刃を開いてゆっくりと紙片の上で上下させ、客に好きなところで「ストップ」と言ってもらいます。「ストップ」と言われたら、メンタリストはすぐにハサミで紙片をカットし、紙片の下半分を床に落とします。

客にその落ちた紙片を拾わせて、両手の間にはさんで隠しておいてもらいます。メンタリストは残った紙片に沿ってハサミを上下させ、別な客に「ストップ」と言わせます。「ストップ」と言われたら、またすぐにそこで紙片をカットして、床に落とします。また、ストップを言った客にその紙片を拾わせて持たせます。残りの新聞紙とハサミは、ポケットにしまうかテーブルに置きます。

2人目の客に、持っている新聞紙の紙片の一番上の行、つまりストップをかけた部分に書いてあることを心の中で読んでもらい、何度も心の中で繰り返してもらいます。つまり、声に出さずに読んでもらうのですが、メンタリストは精神集中の後に客の思っていることを開示して見せるのです！

次に、予言は新聞紙から帯状の紙片が切り取られる以前に書かれたことを強調します。予言を持った客に予言を読ませます。最初の客に手を開けて持っていた紙片の一番上の行を、声に出して読んでもらいます。すると、それも予言と一致しているのです！

こうして1つのフォースが、最後にダブルの開示を持つフルルーティンとなるのです。

(やり方)

私は長い間、「LIST FORCE」は予言としては繰り返しの演技が出来ないと思っていました。しかし、一方でこのやり方は、さらなる発展がないはずがないほど巧妙な素晴らしいアイデアだとも思ってきたのです。

—以下省略—